

書 評

千葉 徳爾 著

『新考 山の人生 — 柳田国男からの宿題 —』

古今書院 2006年1月刊

A5判 354頁 6,500円

本書は2001年11月になくなった千葉徳爾氏の遺稿集である。弟子の岩本通弥・大野 新・小野寺淳・齊籐 純・菅根幸裕の五氏が編集にたずさわった（小野寺氏の「あとがき」）。評者も友人の遺稿集の編集と刊行に協力した経験があり、その困難や苦心が理解できる。本書の一部の企画が各方面ですすんでいた（岩本氏の解題）とはいえ、著者の意図は残されたものから判断する以外になく、この編集は遺族の協力と弟子たちの努力によって達成されたものといえよう。また本書の末尾には、著者の略年譜（全10頁）と業績目録（全30頁）が付されており、遺稿集にふさわしい内容となっている。よく知られているように、著者の著作物は多く、また多岐にわたる。これについて、事典項目や新聞記事にまで配慮して目録を製作しており、著者の仕事に関心をもつ人々にとっては、よい案内となるであろう。弟子ならではの作業であり、評者も今後活用させていただきたい。

さて、多作であった千葉徳爾氏の遺稿集は、これを反映してか、やはり大部である。書評であるからには、この大部の遺稿集を著者の今までの多量・多彩な仕事のながれに位置づけて理解し、また学界の動向のなかに位置づけるという作業がまず要請される。しかしこの作業はあまりにたいへんで時間を要する。多方面に展開された著者の仕事に、評者はあちこちで出会い、またごく一部ではあるがそれを批判的に検討してきた¹⁾。しかし著者の仕事のスタイルにまだ十分に慣れていない評者にとっては、困難がさきに見える作業である。本書の内容の大きな位置づけについては、すでに岩本氏の解題がふれていることであり、上記の課題についてはこれを参照していただくことにして、以下では、本書の内容を紹介しつつコメントする、というかたちですすめていきたい。

本書は大きく三部に分かれ、第I部のタイトルは本書のそれと同じ「新考 山の人生」である。やはり同タイトルの第1章は、本書のもっとも長

い章となっており、編者もその中核と判断しているようである。ただしこの章の構成は複雑で、著者の意図がよみとりにくい。読みすすめていくにつれて、これが『山の人生』（柳田国男、初版は1926年）に記載されたさまざまな奇談の発生過程へのアプローチをめざすことがわかってくる。

この場合、著者の奇談に対する態度は明確である。たとえば四国の剣山から紀伊半島一帯で、山の神が一本足といわれるのを、雪のうえにのこされたキツネの足跡が一直線になる、ということと関連づけて理解しようとする（30-31頁）。一直線の足跡をみると不可解に感じるが、これが山の神の足跡と解釈され、山の神は一本足という観念が生まれたとするわけである（第2章の62-63頁も参照）。奇談を奇談としてうけとめるのではなく、その成立の背景は合理的に解釈できるという確信のようなものさえ感じられる。幻覚について自らの入院時の体験を語りつつ、それを浦島太郎の説話の発生に結びつけようとしている（37-39頁）のもその一つのあらわれといえよう（41-49頁も参照）。『遠野物語』（柳田国男、初版は1910年）にみえる、重い岩を背負って歩きはじめたところで気が遠くなり、幻覚をみた話を低血糖と結びつけて理解しようとするのもその例となる（39-41頁、86頁も参照）。

このようにフィジカルなプロセスを重視して、民俗現象や歴史的変動を解釈する著者の姿勢は、その著作の魅力のひとつとなっており、評者もしばしば刺激をうけてきた。ただし、著者のような老練な研究者をもってしても、適切な事例としてあげられるものは少ないらしく、第I部を通じて同じ話が繰り返して紹介されているのは、問題へのアプローチのむつかしさを示している。また奇談の成立にくわえて、その語られ方がほとんど検討されていないのも気にかかる。

この点で注目されるのは『山の人生』の冒頭に見える、その子どもを斬り殺した男の話に関する著者の態度であろう。すでにひろく知られているように、1904年に発生したこの殺人の背景として、『山の人生』では貧困（炭を焼き、これを売りにいっても売れず、食料が買えない）があげられているのに対し、地元では子ども（娘）の奉公

先でのトラブル（奉公先の主人の妻の嫉妬）が語られている²⁾。著者はこの問題について、わずかに紹介するだけで、この種の話す「山中の貧しい生活」を示す例として位置づけ、つぎの話題にうつろうとする（7頁）。

著者もみとめるように、『山の人生』が依拠したのは男の裁判の記録であり、地元の郷土史家が書き留めたのは出獄後の男に接した人の話である。この場合、もともと同一の事件の背景がこうして対照的に語られたということ自体、興味ぶかい研究素材になると思われる。なりゆきによって同じことが多彩に語られ、さらには流布する可能性を示しており、奇談の展開を考えるに際し、見過ごすことのできない事例である。またこの話は、『山の人生』の冒頭に配置されているというだけでなく、これを読む人の山地に暮らす人びとに関するイメージをつくっているという点でも重要で、検討すべきことは多い。

上記の事件について現地調査までした著者が、これをふかく追究せずに、あえて話題を転じたのは、そうすれば『山の人生』という作品のモチーフに踏み込まざるを得ないと判断したからと評者は推測する。タイトルに示されているように、本書には柳田国男に関する言及が多く、柳田に長期間接する機会があった著者ならではの話もすくなくない。それらからうかがわれる著者の柳田に対する態度は単純ではないが、基本的に師の学説を擁護しようとする姿勢がこうした問題の詮索の留保にあらわれているように考えるのは、想像のしすぎであろうか。

ところで、本章の8～9頁に以下のような文章がある。

西ヨーロッパが引金をひき、戦闘の当事者はかのナポレオンであったが、彼がロシアで敗退し（1812年）、イギリスでは蒸気機関が発明されたころ（ワットの発明、1772年）、日本に隣接する明朝が衰えはじめる（明の完全な滅亡、1662年）。シベリアにはコサック兵が進出しはじめるといったころ（イェルマークの西シベリア進出、1581年）、本草学の研究者李時珍という人物が現れて大著『本草綱目』を著した（金陵本の刊行、1596年）。日本では関ヶ原の戦（1600年）に勝利を得た徳川氏が文治をはかりはじめ、諸種の書物を刊行・普及していく。

『本草綱目』もその一つ（最初の和刻本の刊行、1637年）であって、……（かっこ内は評者による）

ある時期の特色を示すために書かれたものと思われるが、それぞれの時期をみるとあまりにかけ離れている。おそらく著者に草稿の内容を確認する余裕がなかったからと思われるが、遺稿集の編集のむつかしさをあらためて認識させられる。

以上のような第1章につづく章でもやはり奇談が紹介されるが、第2章「山中異界としての野獣の世界」では野獣観がおもなテーマとなる。イタリアの例などをあげつつ比較民俗学のような方向を模索しており、今後この問題意識を継承してさらに検討を深めるべき領域といえよう。また近年人-獣関係が変化している例を、二ホンザルとツキノワグマについて末尾に示しているのは、第Ⅲ部第4章「地理学と民俗学の接点：『自然保護』問題断想」とあわせ読むとおもしろい。人間の動物観、環境観と自然保護との関係、さらにそこにおける地理学の果たすべき役割について、考慮すべき指摘がある。

他方、第3章「山に住む者」は未完の論考であるが、山村論が展開される。著者の長年の調査研究活動をふまえたものとして注目されるが、そこで議論されるのは近代の山村にみられた生業の多様性であり、その歴史的研究について否定的（76、82-84頁）なのは気にかかる。近年は歴史資料をふまえた山村研究³⁾が展開し、著者が専門とする狩猟についても、そうした傾向の研究⁴⁾が登場しているだけに、著者がどのような根拠でそう考えるようになったか知りたいところである。

第Ⅰ部末尾の補論「山の人生」は、著者が少年時代に『山の人生』にはじめて接したところからはじまる、山の生活に関するイメージ論である。平地の住民からみた異界としての山中や山村の人びとについて論じている。この場合、隔絶されているというイメージがある一方で、外部との交渉を検討すると、平地農村よりも山村の方がはるかに多彩で煩繁であったという指摘は、今後さらに追究してみるべき課題を示唆している。山村が高度成長期以後の変化の影響を大きくうけた背景にも、こうした伝統的な外部依存関係があったからではないだろうか。

第Ⅱ部「遅刻してきた神風」になると、テーマ

は一転して戦争と軍隊に関連するものとなる。冒頭の第1章「遅れてきた神風」は、柳田国男のもとでの研究生生活の回想からはじまるが、主なテーマは「神風」という観念の発生で、神風が吹いて日本が勝つというような意味でこの語がつかわれるようになったのは、近世の国学からではないかという主張が登場する。著者らしい大胆な仮説で興味ぶかいが、残念ながらこれは検証に耐えられないようである。

近年の研究成果⁵⁾では、文永の役(1274年)の場合、元軍は撤退の途中に大風により大きな被害をうけたにしても、その開始の直接の原因は別にあると考えられるようになっていく。他方弘安の役(1281年)に際してはあきらかに暴風があり、元軍は壊滅的な打撃をうけた。問題はこの暴風をどう位置づけたかという点である。元寇に際し、各地の神社や寺院はこれを撃退するような祈禱をおこなった。弘安の役のあとになると、こうした神社や寺院はその祈禱や神威のおかげで暴風が吹いたと主張するようになり、関連する文書のなかに「神風」という語もつかわれている。これは著者の主張よりかなりはやくのこととなる。ただしこうした思想が、近代ナショナリズムの一環として、一般にどのように普及したのはいつかという点になると、問題は単純ではなくなる。著者が主張するような民俗学的関心をもった歴史研究が必要といえよう。

つづく第2章「戦争と正月」は軍隊の民俗学ともいえるべきもので、日露戦争時の日本軍を素材とする。翻訳ではあるが、イギリスの観戦武官の記録にくわえ、前線の兵士の手紙や日記まで参照しており、著者の関心の広さには感心する。つづく第3章「シンボルとしての軍旗」では、同様の資料により日本軍の軍旗に対する態度が国際的にみて特異的なものであることを分析する。

こうした軍隊への関心は、著者自身が長期間兵役に服し、その後もシベリアに抑留されたという経験によるものであることはあらためていうまでもない。第4章「戦争と戦闘」以降は、そうした問題意識が表面にあらわれ、「戦争」という大きなプロセスと、「戦闘」という個別的なプロセスが日本では長らく混同されていたという主張が展開される。つづく第5章「神は細部に宿り給う」ではガダルカナル戦における日本兵の排泄行動

が、アメリカ兵によるその捕捉・殲滅を容易にし、ひいてはその敗北をまねいたとする。軍隊における排泄行動のフォークロアにまでおよぶ著者の関心のひろさに驚くが、上記の「戦争」と「戦闘」の混同の指摘からしても、著者はガダルカナル戦の敗北をもっと大きな視野で同時に検討すべきではなかったか、と思うのは評者だけではないであろう。このあとにはさらに補論「兵と捕虜と食生活」があるが、これはむしろ第3部第3章「戦争と私の生き方」とあわせて読まれるべきものである。

第3部「私の歩んだ道：自学のすすめ」は、以上とは対照的に自伝的となり、地理学史的にも関心をひかれる部分が多い。多少の無理はあるが、この各章を時間的に配列しなおすと、第3章「戦争と私の生き方」の冒頭にはじまり、第2章「高等師範学校で学んだこと：研究への道」の前半、さらに第3章の大部分とつづき、さらに第1章「民俗学研究所の柳田国男：その弟子指導法」から、第2章の後半にいたる。民俗学の分野では第1章がとくに注目されるであろうが、評者には著者が旧制高校に進学せず、東京高等師範学校に入学し、地理学を専攻するに至った背景(226-227、239-242頁)が興味ぶかい。旧制中学時代の軍事訓練や配属将校との関係など、著者が育った時代を感じさせる。また高等師範学校での体験、とくに自然地理学との接触が、著者の研究のベースをつくっていることもよく理解された。

軍隊にはいつて旧モンゴル人民共和国および旧ソ連に近いハイラルに配属されて以後では、大興安嶺の兵要地誌調査に従事した点が注目される(1943-1944年)。この種の調査における地理学者の役割については検討すべき点が多く、この部分(252-259頁)はその現場に関する数すくない証言⁶⁾のひとつとして貴重である。著者の大興安嶺における調査は、のちに筑波大学で同僚となる川喜田二郎が参加した探検(1942年)のわずか1年後であるが、それ以前にも調査がおこなわれており、なかには日本陸軍によるものもある⁷⁾。著者をリーダーとする調査がどのような目的でおこなわれたか、知りたいところである。

終戦からシベリア抑留、さらに帰国までの体験は、上述のように戦争や軍隊のフォークロアへの関心にむすびついていったと考えられるが、同時

にのちの『はげ山の研究』(1956年)への準備期間としても重要な意義をもっていた。大興安嶺でのソリフラクションの研究の体験が、帰国後になって山地の植生の問題への関心に発展したのである⁸⁾。柳田国男の主宰する民俗学研究所の無給助手の時代にもその関心は持続し(222-224, 231頁)、著者の初期の仕事形成していく。

以上のような自伝的な章のあとに、すでに紹介した第4章「地理学と民俗学の接点：『自然保護』問題断想」のほかに、第5章「文化地理学について思うこと」が配置されている。後者は日本地理学会文化地理学研究グループ⁹⁾の会合(1989年7月1日)の発表原稿で、著者は文化地理学に対し距離を置いているようによそおっている。ただし、1979年から1987年まで勤務した明治大学では文化地理学を担当し(小野寺氏「あとがき」)、1990年3月に『文化地理入門』¹⁰⁾が刊行されることからすれば、この冒頭の部分は著者の照れ隠しとみるべきであろう。

以上、本書の大筋を紹介しつつ、コメントをくわえた。末尾になるが、本書および著者について、評者が感じたことについてさらに記させていただきたい。かなり前のことになるが、ある方から学者には仮説型・体系型・事実型があるという話を聞いたことがある。もちろんこの場合、学者のタイプがこの3類型につくされるものではないし、各類型が相互排他的であるわけでもない。便宜的ではあるが、著者をこの3類型にあてはめるとすると、事実型にやや近いが、かなり強度な仮説型になるのではないかと常々考えてきた。おそらく生前の著者には、わき出るようにつぎつぎと仮説が構想され、実証がそれに追いついていかないうような状態がつづいていたのではないかと想像される。また著者の多作からすると、まず仮説を発表し、さらに前進しつつそれを補強していくというようなハングリーな性格もうかがわれる。本書をいろいろな角度からながめて、あらためてそうした印象をつよくもつにいたった。

この場合、著者の仕事を歴史地理学や文化地理学、さらに民俗学で継承するには、そうした仮説

構想型の発想によって著者が先駆的にとりあげてきた問題を批判的に検証する作業がまず考えられる。なかにはこれに耐えられないものもあるかも知れないが、大きな展開をもたらすものがすくなくないと予想される。著者の関心は広く、さまざまな要素を仮説に統合しており、検証そのものが刺激的な作業となる。これをいざなう大きな知的資源のストックとして、本書および著者の仕事に今後も注目していきたい。(小林 茂)

〔注〕

- 1) 小林 茂「疾病にみる近世琉球列島」(財団法人沖縄県文化振興会・公文書管理部・史料編集室編『沖縄県史各論編、近世』、沖縄県教育委員会、印刷中)。
- 2) 谷川健一『柳田国男の民俗学』、岩波新書、2001、2-14頁。
- 3) 米家泰作『中・近世山村の景観と構造』校倉書房、2002など。
- 4) 永松 敦『狩猟民俗研究：近世猟師の実像と伝承』法蔵館、2005。
- 5) 佐伯次『日本の中世9、モンゴル襲来の衝撃』中央公論社、2003、98-99、143、185-189頁。
- 6) 米倉二郎「仏印奥地視察日誌抄」(神谷 誠編『南方軍総司令部参謀部兵要地誌班回顧録』創栄出版、1995)、130-136頁。
- 7) 吉良龍夫「探検の歴史(2)」(今西錦司編『大興安嶺探検』毎日新聞社、1952)、30-43頁。
- 8) 千葉徳爾『増補改訂 はげ山の研究』そしえて、1991、1-2頁。
- 9) このグループはシニアの文化地理学者5名(石田 寛・大島襄二・小川 徹・川喜田二郎・千葉徳爾)の発表を聞くとともにその著作目録を刊行した。久武哲也編『日本における文化地理学の展開』平成2年度福武学術文化振興財団研究助成、研究成果報告書、1991。
- 10) 千葉徳爾『文化地理入門』大明堂、1990。